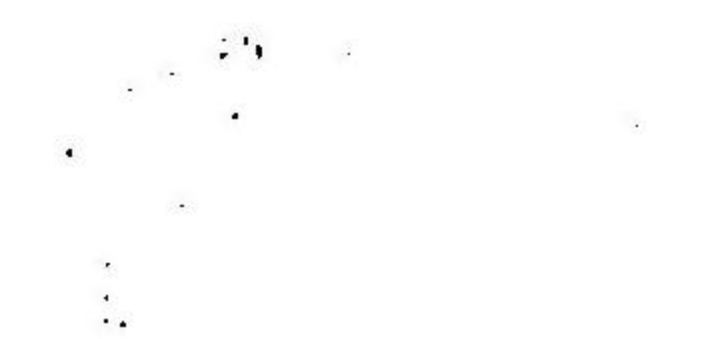


持67

370

常樂智進論

下卷



常樂無上智進論 下卷

問辨人

左めらば三界の離行を聞かん

凡人云々

人の鏡也はや研共捏の一ツに



苦即より榮賀の
學の道も明に
世に住す
自在の金子

先達て夫で心が石炭油出世の爲にじみ盡
る間も無かがり火に研ける玉も曇らせて暗
心の捏の一ツ也噫々儘ならぬ憂世にも自由
つらるりやらんぶもはやりと笑わんす是世

の中わ此の如にして則五心界の愚心わ苦即を捨て榮賀に進故
に榮賀を過て苦即に戻亦鬼心わ害を働諸人を犯さぬ寶を奪て
其樂みを見と雖世わ恐危苦迷罪の此五ツの塵の界に落にあら
すや

問辨人

而らば其苦郎を捨て榮賀に進處の様わいかに
答て歌に

古郷を立退て私まが好が叶なば身わ高帽子洋服に親遊女の町
々で五じつ三日さんさいし廿日余も吞續遺残で異人館建目度
の達もせで丸の裸にならしやるも是も誰故我身の心故さぞや
親衆もお腹がたどふが因縁づくじやとあきらめくださんせ
此くの如なる者も世の中にわ有とか申問するが是等の類を名
付て親の肝焼とわ云まする而て則勇侍の大敵に當て國を亡共
其智名わ亡事無酒女の大敵に當て亡時わ其智名も滅して節て
塵名を殘すにわらすや故に譬ば千代萩の伊達綱宗わ酒女に溺
れて既に國を亡さんとするにわらすや亦伊達兵部わ其國を奪
わんとして身を亡塵名を殘わ是苦郎より榮賀の好先達が故に
わらすや亦伊達宗明わ忠義の爲に其身亡と雖世に智名を殘わ

則苦郎を過て榮賀に戻の處にわらすや御諸君いかに

問辨人

世に兼働好靚と云者有其身の上の様わいかなるや

答て歌に

笠も衣着服も衣に赫けど其身に光無世帯其賊入の氣遣も無そ
泣き釜の中忍入たる盗人蜘蛛飯に製する氣わあらで朝夕祈大
國の授玉いし福の神ならべ授かるおたふくの面わいつおも山
の神競影わ五塵界

は無力の數として其力ら有處の學わせずは働事わいみ兼て唯
其親美色の學斗りを好む中々危して是を耻の第一とは云亦
此歌の如くに五ツの惠あらざる者わ掛る有様でわ御座利ませ
ん歎

問辨人

然らば金子を山の如に積て使捨に云分わ有ません歎

答て曰く
其言分山より増て滿天の如し

問辨人

ならを其利を演たまる

ハイ演まするお聞なさい

虎わ千里を走どきけと其益有をまださかす今わ便利の御代と

なり虎も嘶瀨快が出来て益わ山より高けれど金子を傳て雷電

も瀨車も早便するのでないか

御諸君左様でわ有ません歟先萬の物も世に用するを以て便利

とわ申間しよふ故其瀨車は能瀨快も金子を出して乗人有亦數

多の荷物運か故に其便利を知ると雖虎の如きに唯早斗りて

其用せざる時の便利の益を知る事無然るに人わ數十山の金子

を出て娘を嫁事をしりて數十錢の金子を出て教事をしらす円

上の金子を出て身を親事を好て山下の金子を出て心に錦着事

を好ます茶屋の二階に捨數百山の金子わ保と雖貧民に施教屋
の金子をもたず亦巳の金子を出て賭博を樂みて終に盜賊の同
罪に落も有左れば世の中ハ金子を以て便すると雖其金子の使
様に依てわ卻て其身を亡まするぞ

問辨人

其如に金子を婚に使わ其身の生付なる歟亦わ親の教の悪さが

故成や此義いかに

答て曰く

其利一涯にわ申されね共小子存にわ

飴菓子甘さわ左程にもありで親の甘さわ中々に毒と考ます

る此故わ此處に一ツの咄が有ますある剛家に一人の男子有

て両親是を愛する事限り無して唯撞に養たるが其子成長なし

て後終に遊女に心を迷わせて夜毎晝毎に通しが或夜の歌に

一人来て一人に歸後の世の道を教わ犯けれ人の好わ樂みとな

らむ教よ色の道積懸路わ山のはの月わくるわの夜明かな
此の如に花やかなる歌を誦て怠無通しが此末わどんな事に成
やといふは隠々悲かな其大位成處の身代わ皆亡振てままいて
唯身に残わ破かぶれの三味線と敷こんだる遊藝斗りて有まする
がア藝わ身を助とやらで人の門邊に立ちてわ其歌を誦て一
文二文の乞力を願て非人と迄も落終て腐しとかや云咄しが有
まする左れば其時に後の世の道を敷わ狂けれど歌に誦し其身
の末わサア道で有まするを是等の類を以て則夜見地の五塵界
亦佛教の地獄に落入處の有様でわ有ません歎何様なる者こそ
狂さどわ云まするを而て曰く其子の悪塵わ是其身の悪塵にあ
らすして親の養育甘さを以て之を悪塵とわ云故に親に清心有
て其子清淨に養親悪塵にして其子不淨に成長す故に亦其政道
正き時わ民明治の御代に住其政道正しからざる時わ御代穩な
らすして國に罪人滿か如し故に官民の諸罪を制するわ慈愛深

の處也且亦之を制せざる時わ國に逆賊蔓延す之を則親の甘き
わ中々に毒と云が如にあらすや

問辨人

然らば亦問わんいかなる罪を造共念佛さる申せば如來様がお
淨土に向い取て下さる、が是に過たる功德有やいかに

答て

ハイそんな能味事わ出來ますまい亦罪を造て其淨土に往かる
、どならばは是佛教は魔道宗成や

問辨人

スリヤ亦なせで有まする歎

答て亦歌に誦

親の日じやとて女中を集土瓶の口から出る儘に管咄に時遷味
能お茶も出流る、是をくよふで吞佛イル、是隣の姑さんお前
の中々辨者で有まする故演説をしてきかせなさいよ姑なんじ

や演説と成るらゝいまやれて居な……そんなら佛説の十方世界
を演題にして演まする能開玉を
憎さも憎し憎々憎や愛男子の嫁憎し一地獄鬼心にやりたやあの
二餓鬼界を三畜生界愚心めらが四修羅界のふり五人間界智心も
無やつじや心六天道界せすにさけ母を大事にするほどの憎な
七聲聞界圓心八圓覺界か親わ九菩薩界神心と同前を是も佛界の教也
何よりかよりも孫わ愛よ嫁わ憎いぞ南無阿彌陀佛
サア御諸君とふで有まする斯の如くの有様でわ其念佛が用に
達まする歎達とならる魔道宗に相違わ有ますまい而て云世の
中に於て嫁を憎の老母ならば其身の若嫁の時にして其親に孝
を達と云の道わしらすに唯嫉讐を常の仕事にして縫針の道わ
聊も出来ぬと云様な女也といゑるが如きの者でわ有ませんか
故に狂歌に詠咄しにも釋加の眞わ居出もせで茶香吞人わ蛇か
鬼歎と云が如で有まするぞ

別人問て曰く

今出家の行處の有様わ我職道を忘て女に戲檀家を奪牛わ三度
の飯のさいと云様な者が有とか申問する直亦佛教に於てわ酒
肉を禁制女わ鬼と詞て有まするが掛る出家も佛成や亦わ鬼と
云歎何れを何れに定らるゝやいかに
一人答て云

其出家わ鬼で無して其女を鬼となす此故わ則佛教華嚴經に曰
く女人地獄の使能佛種子を斷外面菩薩に似て内心夜刃の如し
と有亦法華經二十六陀羅尼品にわ鬼子母並に十羅刹女を現た
り一名藍婆二名毗藍婆三名曲齒四名華齒五名黑齒六名多髮七
名無厭足八名持瓔珞九名臯諦十名奪とあり皆是女にして面わ
美玉の如と雖一切衆生の精氣を吸事を好處の鬼女也亦名の現
たるわ十人なれども外に數千の子有鬼子母其子を愛する事限
無然るに他人の子を取喰ふ事いく千人と云其数をしらす時に

釋尊是を憎て其一人の子を蔭て鬼子母を深誦給鬼子母恐入て
我子を乞願捨惡持善の心となりしと説たり左れ共是れ遠印度
の事なれば唯經文を見て知の身に於て正しく見たる者無然に
我國に於ても是に相似たる者有母わ學逆教子女と云其子十人
有て皆娘也一名敵舅親二名夫憎降三名亂妻色四名多不禮五名
深憎嫉六名迷男色七名競子故八名瞽蔭言九名無働靚十名亂世
工也此母娘形わ美艶と雖世の治を嫌て亂を好處の鬼女にして
之を鬼子母十羅殺女亦わ女の十惡と云歟則佛教玉邪經にわ女
の十惡を説たり是を撰教歌に誦
一ツ一人の子を産る時に男子わ喜べど女子わ父母喜ばず二ツ
二た親養育をするに付ても女子の身わ未頼き事なかれ三ツわ
身を唯慾めよ女人わ常に恐有是も一ツの惡なるを四ツわ嫁入
他の家になして他人を親とすわ哀共其苦みわ五ツ生離別をな
すも深親子の縁淺き女人の憂わ限無六ツにむつまじかれは吉

常に夫の氣げん取退出さる、事おそる七ツ難産有無や懷妊な
さば哀にも世にわ死も多かりき八ツわやよいの花にまだいた
らぬ迄は父母に檢録せらるわ女子の道九ツ古郷を去て其他に
嫁入らば常に身を夫の爲に禁制らる十の年をゑるどとも子孫
の爲に訶制さる、わ女人の惡じかな左れを佛道にわ女わ此の
如に訶て有ます亦其出家わ吉にするにわあらね共教言葉わ
眞也其信の言葉わ守らすして諸人を迷女ならを是ぞ鬼也と考
ますると云
其時一人進出て論す
貴君の説も一利有と雖我存意わ左にあらすして其出家を鬼と
なして其女を鬼とせず此故わ直佛説妙辟經に曰く信言を持す
る者わ寧火星を以て眼中に流入し雙目を失えて盲て見所無共
女色を觀視し種々の相好美艶を分別せざる念誦者をして威力
なからしむと種々の嚴誠有り然に出家僧ほどの身とまて酒肉

女に迷て心を塵口に信の言葉を覩て教をなす共數人之を守る
可や亦下人わ上人の心に順教を以て直とするにあらすや故其
善惡わ其道の長たる者の知る處也亦直道をノて其田の法を凡
としてムの儘に行て月日を送歸を以て鬼とわ云にあらすや是
等の類を以て五心界の内鬼心愚心の二ツにして則夜見地の五
塵界に落が如きの者成を故に社人わ是神教の教を守亦出家わ
佛教の教に順て其行をなすを以て社人と云亦わ出家と申る歟
則五心界の内智心面心神心の此三心にして是ぞ高天か原の五神
界に登が如きの者にあらすやいかに
答て云

御賭君方の進論わ皆供至極なるが其苦樂の姿を則五文鏡の鏡
に遷て現故何れも能々考見て迷の邊を晴玉然に其面影ハ
夢なるを過にし愛を戻見よ梅の花咲都にぞ出て
左れば此過にし愛わいつなるやと申すれば譬ば草木わ春に

花を咲せて夏に枝葉を羅秋に葉を落して冬に至て枯木となる
わ愛也と雖亦元の春に戻れば則元の花を咲す而して其花開の
時に冬の枯木を戻見よ是其愛わ夢にあらすや左れども松わ其
葉を落さす其色變せずして愛影を見せず故常盤木と云にあら
すや人亦此の如にして五空より五胎と成て生じ出る迄わ五塵
五塵わあらねども成長するに順て其惡塵を求て身を苦むると
雖死て元れ五空に戻れば則現世の五胎の苦わ忘るゝにあらす
や然に五樂を守者わ現世の愛苦も無にあらすや亦云是新年の
元旦には人皆真心を保と雖月日を送に順て其惡塵生するが故
に積年暮の余夜に好て下賤の苦わ地獄成歟是を名付て五塵界
とわ云也左れば其時詞人が鬼歟亦詞らるゝ人が鬼か是其苦わ
我心より生する而て見れば詞らるゝが鬼にして詞わ鬼で無と
云歟ならば人を迷すの女わ鬼にあらすして迷の男が鬼なるや
之を能々考見れば此世の中わ定無や世わ定有と雖已が心に定

無也此故を論じて曰く則人心わ人胎を離て世に迷流る、時の
夢中の如し其證據にわ則滿心起時わ其競の止事無して是世に
恐有にわらすや亦怒わ世の恥を忘て害を働わ迷也怒わ苦の元
結成や逆わ明世に住事無して諸罪に沈嫉わ厄の道を求此の如
に五惡わ五塵の世界に住わ是人胎わ清して其心も清きと雖其
清心わ清胎を離て世の塵中に煙が故に其惡き夢を見物也故に
除夜に苦者わ心わ諸方に走りて其胎に止まる事無と雖も夜わ
東雲に明渡れば民の木毎に梅の五行の花開き豊保化今日の音
を聞て其塵に埋たる處の心わ我胎に戻來て則元旦の都に住始
て樂みを見にわらすや故も其鬼も其人の心中に無して是世界
の塵中有故に清心わ清胎に留て世塵わ世代に留めすして世塵
わ清心を以て清むるをこそ人たる人の心とわ云まする

問辨人

其地下の五塵界わ分利ましたが天の五神界の道利わいかに

答て曰く

門松わ死出の都の一里塚高天か原わかくや有南
是新年の儀式と申わ則神代の様を忘ざるか爲也故に大君の尊
わ梅を守て代々の政事を治給か故に民の木毎に五行の花を咲
せて樂みを見冊踏の尊わ徳にして夫門松の二本わ此陰陽の御
神に形取其御中に始て天照大神現ヒ玉いてより人種を開たも
ふか故に民わ其徳を得て皆十八の公の心を保て五倫の陰陽松
の二た葉の如に和合なす亦松の天照大神の守護成か故に則門
松の上に赤き橙を靚わ此御神に形取て是天地陰陽の間を代々
赤照給の心也功わ大國主の尊にまて國土を開て萬の人を住わ
せ五學の道を靚給が故に五開神社とわ申也直説則歳繩と名付
て靚處の七五三わ是神祇の光明の形成歟五文十五の五行を形
取也此故に是しめの七五三を合すれば十五と成之に陰陽五行
の籠が故に其功德廣大也かるが故に七の二ツわ日月の陰陽五

ツわ歳星木焚或火太白金辰星水鏡星土の五星也之を合して七曜とわ云亦次の五の梅の五行三の天地人の三才亦天地の二ツわ松の二葉の如にして其陰陽五行の道を悟開者わ是人の一ツ成か故に萬物の長とわなす亦云七の天神七代五の地神五代にまて三の二ツの天地の神人の一ツを守護仕給の處也左れば人の一生わ則一年の様に等して是を五文の鏡に遷て其三界を明に現す而して曰く則人の五心界の鬼心愚心の二ツの者は五常の道を守事無五ツの恵を保事無亦五樂を樂事も無して常に怠是満慾怒逆嫉の此五惡の功を積が故に死て其苦を見と云歟夫歳暮に憂見わ地下の五塵世界の面影と知れ亦智心圓心神心の此三ツの者は五文の道を能悟て常に怠事無が故に其苦厄を除て高天か原に登と云歟是新年の元旦に出て其樂を見わ則天の五神世界に住が如て有まする

問辨人

然らば新年元旦にわ天下の諸人皆真心を保やいかる

答て

ハイ先皆真心有を以て道利とする左れ共一涯に思は世を過此故を歌に詠

掛文明開化の御代に和色に心迷わすやつわ貴人と非人の大違

心得違のない様に文明開化をしやしやんせ

辨と學との停が目度で萬事任た其過でいつか世帯も操られ

徳と毒との大違 全

好の道にわ心が迷開た言葉の早がてん

印紙と新酒れ大違 全

辨に任せて後の世教心の底わ慾しれず真然立炬の衣

和尚と胡椒の大違 全

花なら櫻其色艶わ溢掛し茶や女多の人を陰殺

美人と鬼人の大違 全

智恵が有ぞと選舉をしたりや慈しらすの我儘さばき

役と逆との大違 全

天上界にぞ生る、など、世に住人の氣を迷わすわ

耶蘇野狐との大違 全

漢言英言も學だ人が文明開化の道踏迷慾に任て世を

いつわるわ學者愚者の大違 全

帶す刀なわ其敵の首切わ叶わで田中の者を犯心わ最賤

くて武士と虫との大違 全

此の如の者も世にわ有とか申しまするが是等の類を名付て則

心透開化と云歟是に迷わさる、者も矢張同類で有まするを故

に御賭君進論會にて智色を研其書を文明開化して迷わぬ様に

成ならば五文の鏡も光りか出る是を單に願ます

次に五文論歌を詠
第一梅 色生倫を論す

御代に正き色わなに

則梅わいつ咲や

心も開く恵たわ

木毎に色の生するわ

梅花五ツに開きぬわ

五行どわ亦いかなるを

ならば五行の第一わ

真守りて渡世わ

然らば幸福求わ

五ツの恵わ誰が恵

故大君わ五行たを

第二松 學圓常を論す

御代にて堅色わなに

いつも姿わ替らぬか

豊樂見する梅の花

人も始めて新年に

諸木に早き初花を

梅に倫春のかは

是を五行の形也

凡萬物五に圓ひ

人の真わ五常なり

教侍農工商五學

則行慈直固錫

日本五開の神なるを

民の木毎に開く花

松の色葉を學身を

是十八の公なりぬ

諸木も學圓れば
競わ研智色かや
二葉の意味に有無歟
いか成道にをさするや
ならば五圓の利わいかに
侍人智勇を研かばや
農業進其時わ
諸工に競進なさは亦
然らば商人進なは
此其如圓るわ

第三功 穀樂惡を論す

御代の苦樂の元は何
其樂みを見道わ
功をつまさる其時わ

百に反を松の葉に
そわ常成ををさするは
陰陽和合の形也
五倫わ是に順るは
教わ神人やわらくる
天地の圓もをさまりぬ
月日豊にぞひかる
草木しげる如なり
金鐵國に滿みてる
天照神の惠なり
貴人も下賤も五穀也
常に五學功をつめ
からを工む事無くて

第四徳 空胎惡を論す

未わいかなる利になるや
然らば人の好だわ
穀の苦樂わ常なるぞ
五樂の功をつむの身わ
ならば五惡をなす時わ
からを工む功わまた

御代に生する前わ何
形もあらぬ其空わ
胎を築梓わ誰がなすぞ
ならば世界の始わ
其空胎となるの初わ
胎に惠を受相わ
惠て色と哺めるわ

惡き貧苦にしづむ也
樂みよりも外になら
人わ五樂の真あり
是を日本の五神也
衰れや地下の五魔界
大國主の守りあり

何れの道も尤わ空
欲する處の胎をある
陰陽五行の惠なり
萬をしらぬ皆空氣
國常立の尊なり
次の五代の神としれ
第七四諸の尊を

和合をなせる其徳わ
色亦御世あ生するわ
地神五代の末わ亦

此陰陽の神をかし
天照神の御影也
君が慈にしたがうぞ

第五悟 三界を論ず

御世に悟の一わなふ
我惡どの悟の益わ
其信樂の御代松わ
其功徳たも無の身わ
未わ如何の事成や
其善惡を造ぬわ
三界和く利わいかに

我惡志わ源信なるぞ
心和く梅のはな
高天か原の五神界
心に五惡生す故
五塵界にぞ落入ぬ
則人の五心かい
須佐の開悟わ和歌の道

次に俄演説

御諸君に一舌申上まするわ別の義でわ有ませんが先今日の有
様を見に貴賤の階無中々文學に達の勢にて爾々文明開化の御

見にマア十人が九人迄わ腹事をして
改頁仁和歌演説と云事を國を儲かば其樂みに心を寄て其悟
を開て諸人は是が爲に智色に進事もあらんかど之を工みて天下
に開廣せんが爲に發行致て居まする故に何れも好有の御方わ
御加入有て辨師を願上まする然に今せきの演題わ口辭にて申
上ます

大ツエフシ

兩國橋の真中で居去と座頭さんに座が出逢まて頃わ水無
月炎曇り天に眞黒々の黒雲が飛で来て光やさるく夕立に
た、ぬ居去わ肝つふし前後生胎無目闇左右を好めば川の
中道わ此方ぞと指を指啞や愛の三かたわ自由がならずで
死世じやな——

サア御諸君道有まする世の中に於て足わ堅固に目わ冷やか口

わ高聲を發の満々たる處の體を
持ながら掛片和に等者か有と
か申すするが是等の類わ此なる自由の御代に生達共其自由を
なすの權利わ無者で有まするぞ
問辨人
辨師其自由の譯わ聞ふたが演題を歌に簡わ余の自由でわ有ま
せん歎

キア夫が樂の力らに頼處の大杖
狂歌

金子につまりて燃わた、す憂世わする、ひまもなき

氣世習

智恵無ば見せ物にせん壽老神長き頭を金子にさらして

光其

女狐に馬鹿幽霊が朝の頭から迷よ……た……た……

遊女遊

どんとちらかす棚元た水にびらやと言われた下女ヒや物

お銀の曲

洋服を着て手わといかすにかいかの道しらみでわ

家の虫

うちわけんかも益無蚊屋と蚊々をすへても己が恥

無銀の刺

漢言ませりて咄の底わからと言様な今のしな

偽學者

身に火のついて其肉損の元を咄せばはヒヒやもの

常の忠

煙か戻りて忍のんだやつも這ていぬかや畜生め

問夫

身わ三味線に引摺されて夫も糸よふの割じや物

無か策策

和歌

恩程如何ともせん憂世かな嗚々儘ならぬ我心也

年暮

昨日迄唯白雪と廻にしが今日ハ木毎に花ぞ咲なり

新年

水の葉散秋悲む人の常落身に露の涙なりとも

悲愁

誤散時こそ人の真も過てや哀恋まじきと

思慕

好みわら唯何事も已か身と憂兼て憂世なりけり

そごりに羨す

榮實なる好みわ人の常なれと思ぬれば何の抑其

學で好む

制するとならば我身的心だを制して人の心制せよ

眞道の

常盤木の色わ神代の面ぞかし替安さわ人心哉

迷

憂無唯冷げさに澄月の影わ我身の心にそあけ

罪

天かたに咲や今宵の月の花散すも己が心からどや

罪人

常樂無上智進論下卷終

正誤

一丁ラウ 八行目。するの。さるの誤 二丁目 オモテ十三行目。若滅ハ。叔の誤 四丁目 オモテ 九行目 惡いもハ。人の誤 四丁目 ウラ七行目 神。どハ。をの誤 六丁目 ウラ終ニ。樂の世ハ。未の誤 八丁目 オモテ 六行目 淺井。氏ハ。其の誤 九丁目 終ニ 直。周ハ。固の誤 下の卷 二丁目 オモテ 七行 なら。べハ。での誤 三丁目 ウラ 七行。狂ハ。犯の誤 十一丁目 ウラ 八行目 草木茂る。が。がハ。加字

明治廿七年十月六日印刷
明治廿七年十月十一日發行

定價金貳拾錢

編輯者兼

筑前國宗像郡津屋崎村大字天神町八百十三番地

安武勝太郎

發行者

全國全郡全町千三百七十八番地

鳴村篤太郎

全

全國全郡全町千三百七十九番地

吉田勝太郎

印刷者

福岡市上名島町五十二番地

大原勝三郎

